

[24_4] 図書館情報 : 九州大学附属図書館報 :
24(4)

<https://doi.org/10.15017/18008>

出版情報 : 図書館情報. 24 (4), pp.27-36, 1989-01-31. 九州大学附属図書館
バージョン :
権利関係 :

九州大学附属図書館報

図書館情報

The Kyushu University Library Bulletin

Vol. 24, No. 4 (1988, 10~12)

目次

- ・所感 ----- 27
- ・昆虫学データベース (KONCHU) について ----- 28
- ・視聴覚ホールの使用料金等について ----- 34

所感

図書館長 平 嶋 義 宏

昨年12月の中頃、院生の一人の学位論文の校閲に追われていたさなか、四国のある国立大学の先生から研究室に電話がかかってきた。親しい付き合いはしていないが、1,2度会ったことがあり、名前は良く覚えている。「至急に見たい1900年代のイギリスの論文があり、その文献は九州大学の昆虫学教室にしかない。誠に申し訳ないが、その論文をコピーして送っては戴けないか」というのである。ここまでは毎度のサービスである。日本一を誇るわが九大の昆虫学蔵書は全国の昆虫学者のお役にたっている。ところが、今回はもう一つ注文がついた。「急いでいるので、ファックスで送ってほしい。うちの大学の事務室のファックスの番号はしかじか」というのであった。困った時はお互い様である。さっそく、これも研究に追われて忙しい助手に依頼して、文献をコピーしたうえにファックスで送ってもらったのである。電話をもらって1時間もたっていないであろう。ところがである。それっきり全く音沙汰なしである。礼状もこなければ年賀状もこない。やりきれない気持ちには私だけではない。研究を中断してサービスにあたった助手の先生もおなじである。

現職の図書館長が生の感情をあらわにするのは好ましい事ではないが、最近体験した面白からざる事例として、ここに紹介した次第である。今後はこんな問題が多くなってくるであろう。便利な機械が登場し、それを使ってますます便利な世の中になってゆが、「人間らしさ」がそれについてゆかないのでは、学問をしてなんになる、と言いたいのである。

私の昆虫学講座に、世界中の文献がひとりで集まった訳ではない。永年のあいだ、乏しい研究費の中から、血のにじむような努力をして収集してきたのである。九州大学の270万冊の図書しかりである。その一冊一冊にそれぞれの歴史があり、研究者の魂がこもっている。これらの貴重な本を利用したい人は、それなりの礼儀と感謝の気持ちを忘れないでほしいのである。

大学図書館をめぐる情勢は、近年、おおいに変貌してきた。外部に流れている情報量も多いし、情報網は四通八達の様子をしめしている。極端に言えば、日本のどこにいても、ほしい文献はたどるところで見ることが出来る。今後、大学図書館にはこのような外部からの要望がますます増加するであろう。

わが九州大学図書館がこのような情勢にどのように対応していくのか、将来の大きな課題の一つ

である。

さて、私は本年3月末日をもって九州大学を停年退官する予定である。私にとっては、大正と昭和が同時に終わった感がある。平成の世は、九州大学図書館にとっても、充実と発展の時代であってほしいと願う次第である。この2年8ヵ月の間、図書館長として目立った働きもなかったことは申し訳ない思いであるが、九大図書館は、一步一步、着実に成長していることは力強い限りである。縁の下の力持ちになっておられる図書館員の苦労を多としたい。

私の2年8ヵ月の在任中、九州大学当局からいただいたご援助並びに各方面からの御協力に対し、心から感謝の意を表します。

末筆になりましたが、九州大学附属図書館の一層の発展を祈ってやみません。

(平成元年1月8日記)

昆虫学データベース (KONCHU) について

多田内 修

九大農学部昆虫学教室(主任 平嶋義宏教授)では、1987年度から文部省科学研究費研究成果公開促進費により、昆虫学データベース (KONCHU) を構築している。一部のファイルは九大大型計算機センターから大学間ネットワークシステムを通じて全国の大学・研究機関に公開しているので、その概要を紹介したい。

生物関連のデータベースには、文献データベースを主とする案内型のデータベースと、生物の様々な属性のオリジナルデータを含むファクトデータベースの2つがある。文献データベースは文字どおり、文献に関する書誌データとキーワードからなり、これには抄録が付く場合と付かない場合とがある。一方、ファクトデータベースは、さらにデータの種類により、文字、数値、画像の3種類に分けられる。例えば、生物の原記載や数値データそのものをそのままデータベース化したものや、生物の全体図、部分図、写真などの画像をデータベース化したものなどが考えられる。また、ファクトデータベースをもとにして、様々な作業のできるシステムも開発されている。以前筆者が開発した総合的分類作業システム(SAC)では、生物の種名、形質名、そしてそれらに対応する個々のデータをあらかじめファクトデータベースとして登録しておき、このファイルをもとにして、生物の同定、記載、検索表作成、分布図作成、形態解析、分類群比較、分類群作成など一連の分類作業を行うことができる。

筆者らが現在構築している昆虫学データベースは、文献データベースである。昆虫類は世界で約100万種、日本国内でも2~2.5万種は生息すると考えられている。毎年膨大な数の文献が発生しているが、特に昆虫学では分類学のみならず、応用昆虫学の分野においても文献検索はかなり古くまでさかのぼって行わねばならない。最新の研究分野では文献の寿命は比較的短い、分類学などでは、昆虫の種名の決定に際して50年以上前の文献を調べることは日常茶飯事である。ところが、アメリカの宇宙開発の産物として始まったデータベースは、その歴史はわずか20年にすぎない。

現在生物学関連の文献データベースとしてもっともよく知られているアメリカのBIOSIS (Bio-Sciences Information Service, 2つのファイル BA, BA/RRM を合わせて年間収録件数約35万件) は1969年度より、またイギリスのCAB(年間約13万件)は1973年度より、データベース化が開始されている。動物学で重要な二次文献誌である Zoological Record は、1886年以来100年以上も発行が続けられているが、データベース化はBIOSIS との共同編集の形式で1978年度分から始められている。最

新の情報は、これらのデータベースにより検索できるが、20年以上前の文献のレコードは国際的にもまだ存在しないと思われる。また、和文で書かれた国内文献の大半は、このようなデータベースには収録されていない。1800年代以前から蓄積のある昆虫学部門では、これらのデータベースの利用価値は限定されている。これを補完する意味で、筆者らは1985年以来、九大理学部基礎情報学研究施設の協力を得て、国内の主要昆虫学雑誌のデータベース化に踏み切っている。

昆虫学データベースは一般の文献データベースと異なり、レコードの単位は1つの文献ではなく、1文献中に記録されている昆虫の学名または和名である。つまりモンシロチョウとか、*Pieris rapae* (モンシロチョウの学名) といった昆虫の分類単位が1つのレコードとなっており、種名のほか、属名、科名、目名などの種より上位の分類階級名もレコード単位として扱っている。データ作成の際には、1文献中に記録されている昆虫名を拾いだし、その分類単位ごとに、学名、和名、著者名、論文タイトル名、雑誌名、巻号頁、刊行年、目名、科名、同物異名、分布、キーワードの項目についてデータを記録している。実例を下に示す。

```
#
(TAX) Gracilentulus sakimori Imadat'e, n. sp.
(JTAX) サキモリカマアシムシ
(AU) IMADAT'E, Gentaro
(T) A new species of the genus Gracilentulus (Protura, Acerentomidae)
from Tsushima Islands, Japan
(J) Konty^u
(VNP) 45: 161-164
(V) 1977
(OR) Protura, カマアシムシ目
(FAM) Acerentomidae, クシカマアシムシ科
(DST) Japan (Tsushima Is.)
(KEY) systematics; new species; description; type (female: preserved in Nat.
Sci. Mus., Tokyo); type locality (Mt. Tatera-yama, Tsushima Is., Japan); t
axonomic notes
#
```

このように、昆虫名をレコード単位としているために、検索したい昆虫名がはっきりわかっている場合の検索効率は極めて高い。また目や科や属といった、種よりも上のグループ名がわかれば、これらの項目から検索は容易であり、近縁のグループについても情報を得ることができる。また、同物異名の項目を設けているので、学名が変更された場合でも、旧名から検索が可能である。さらにグループ名や分布を項目として設けているので、グループごとの昆虫のリスト作成や各地域ごとの昆虫のリスト作成を容易に行える。もちろん通常の文献データベースと同様、分類、形態、生態、生理、生物地理などに関するキーワードからの検索も可能である。

昆虫学データベースは、昆虫学に関する1900年以後の主要な国内昆虫学雑誌を対象としており、各雑誌を1つのファイルとして構成されている。現在公開しているファイルは下記の2件であり、また日本昆虫学会誌「昆蟲」(1917～)の全巻のデータベース化も、本年4月公開をめざしてデータ入力を進めている。使用言語は英語と日本語であり、雑誌の性格から、収録データの地域は、日本、東アジア、太平洋地域を主としている。

1. ファイル名: MUSHI

雑誌名「MUSHI (蟲)」。福岡蟲の会発行で、1928年の創刊。1985年の第50巻をもって終刊した。レコ

ード件数は、8,870件。

2. ファイル名：ESAKIA.

雑誌名「ESAKIA (Kyushu University Publications in Entomology)」。1960年に九大農学部附属彦山生物学実験所の昆虫学論文集として第1号が発行され、その後、1978年の第11号より九大農学部昆虫学教室と共同編集発行となり、九大農学部昆虫学論文集となっている。現在まで26号(1988年)が発行されている。レコード件数は、3,063件。

昆虫学データベースのデータベース管理システムは、九大理学部基礎情報学研究施設で開発されたテキストデータベース管理システムSIGMAを用いている。このシステムは、1981年に研究者向きの情報システムとして公開され、1987年の第2版では日本語が使用できるようになった。文献の蓄積・検索、論文の作成、自然言語の解析、書類整理、その他データの収集・加工など、研究者の日常的な活動を支援する目的で開発されている。ファイル全体を一度だけ先頭から一字ずつ走査する一方向逐次処理に基本を置いており、トーマスマン・ファイルなど自然言語の解析や文献データベースの作成・検索に利用されている。

大学間ネットワークシステムを通じて、昆虫学データベースを利用するには、あらかじめ九大大型計算機センターに利用登録をしておく必要がある。TSSセッションを開始した後、データベース管理システムSIGMAを起動し、SIGMAのSEARCHコマンドなどを用いて検索を進めることができる。

本学教官著作寄贈図書

〈中央図書館〉

村山 正治 (育)

E.T. ジェンドリン著 村山正治訳
夢とフォーカシング
福村出版 1988

古川 久敬 (育)

集団とリーダーシップ
大日本図書 1988

組織デザイン論
誠信書房 1988

武野 秀樹 (経)

新近代経済学要論
有斐閣 1988

伊藤 弘文 (経)

入門租税論
三嶺書房 1988

〈教養部分館〉

小島 恒久 (養)

九州における近代産業の発展
九大出版 1988

山口 宗之 (養)

ベリー来航前後
ベリかん社 1988

伊藤 弘文 (経)

入門租税論
三嶺書房 1988

〈理 学 部〉

岩永 貞昭 (理)

ビタミンK.
メディカル・ジャーナル社 1988

〈農 学 部〉

長 憲次 (農)

水田利用方式の展開過程
農林統計協会 1988

深尾 清造 (農)

林業経営の展開過程
ミネルヴァ書房 1988

◆ 研 修

第 8 回西洋社会科学古典資料講習会に参加して

松 田 尚 代

〈とき：昭和63年11月16～19日 ところ：一橋大学社会科学古典資料センター〉

《講習日程》

第 1 日

- ① 古典研究(総論) 古賀英三郎 一橋大学社会科学古典資料センター教授
—古典の魅力, 私の古典遍歴, 古典とは何か— その暫定的定義
- ② 書誌学(1) 川原和子 三重大学人文学部非常勤講師
—スコットランド啓蒙期の出版物について— 時代区分, 対象資料の限界について, 関連する人名, 主要学協会・クラブ
- ③ 古典研究(各論1) 和田重司 中央大学経済学部教授
—日本におけるスミス像の変遷—

第 2 日

- ① 書誌情報の電算機処理 岡崎義富 兵庫教育大学学校教育センター助教授
—古典資料目録とMARC— The Eighteenth Century Short Title Catalogue (ESTC) の事例について
- ② 古典研究(各論2) 江夏美千穂 東京経済大学名誉教授
—「『資本論(1)』〔古典版〕の引用文献にかんする資料集」の作成について—
『資本論(1)』の系譜, MEGA・MEW の系譜, 新 MEGA の篇別構成とIIの巻別構成, 検証・探索の若干の事例
- ③ 各国の貴重書図書館・文書館事情 津田内匠 一橋大学経済研究所教授
—フランス—

第 3 日

- ① 書誌学(2) 関戸信夫 成城大学図書館事務長
—西洋古典資料目録の作成について— 「高垣文庫貴重書目録」(金融・貨幣論を中心とした1850年以前の洋書929冊)の整理を経験して
- ② 書誌学(3) 大國克子 関西大学図書館収集整理課課長
—図書館員と書誌学— ビブリオグラファーとしての図書館員, 「矢口文庫目録」を中心として
- ③ 情報交換・座談会

第 4 日

- ① 古典研究(各論3) 杉原泰雄 一橋大学法学部教授
—フランス革命と憲法政治関係の資料— どのような資料を集めるか, 無限に近くある資料からなにを抽出するか, 国民議会・国民公会・体制の側の資料, 民衆の側の資料

受講者は33名(関東27名, 関西5名, 九州地区1名), うち6名が研究者で, 他は全員大学図書館の職員であった。講義は, 古典研究と書誌学の二本の流れに沿って行われた。古典研究の

講義では、主として各講師の研究テーマに則した古典資料の探索・収集の方法が紹介され、特に研究者の立場から古典を取り扱う際の問題が指摘された。たとえば、江夏講師は『資本論(1)』の系譜を語る中で、原典と見なし得るのはマルクス自身が手を加えた第2版までであること、この原典と以後のエンゲルスやカウツキーなどによる改訂版とは峻別されなければならないことを明らかにするとともに、最近のS.U. 共産党M.L.研究所およびS.E.D.M.L.研究所共編の新MEGA版のII/5-6は原典に忠実な版であることを、「これもベレストロイカの一環でしょうか」と笑いながら語られたが、著名な古典作品であればあるほど多くの版を重ね、その度になんらかの手が加えられて「原典」とは異なるものが作りだされていく事実を再認識する上で有意義な講義であった。

実際、古典資料の目録作業では、版・刷の明記は特に重要であろう。また書誌学の講義で論じられたことではあるが、おおよそ1821年以前のいわゆる西洋古刊本に固有な長いタイトルは、それ自体に本書名、別書名などの種々の情報が内包されているので安易に省略できないし、あるいはページ付けがされていない図書についてはページ数の補記をすることなどなどは、当該図書の同定や他の図書館所蔵のものとの異同を明らかにする上で不可欠である。しかし目録作業の上で、資料に内在する情報を漏れなくカード化する必要が有るだろうか。この問題は、講義の中では、特に研究者などのコレクションの目録を作成する際の問題として提起された。すなわち、特定の研究者のコレクションの目録は、単なる所蔵図書の記録ではなく、当該研究者の学問の方法論や体系が目録を通して読み取れるように編集する必要があるという指摘がそれである。

この点については、筆者自身の体験を語っておきたい。筆者はこれまでペラ文庫、クンケル文庫と二つの大型コレクションの目録作業に携

わり、それぞれについてコレクション入手に関わった研究室から上記のような注文が出された。しかし、どちらの研究分野についても筆者は専門家ではなく、いずれの場合にも、書誌的に隠れた情報を米国議会図書館目録や大英博物館目録などで探索し、特に後者のコレクションについては資料に直接に書かれた献辞などの情報を明記することが、目録業者としての最大限のサービスであった。筆者の能力が及ばなかった事は事実であるが、一方でこうした調査作業がルーチンワークを大幅に遅らせて未整理図書の慢性的な滞貨を一層増大させたこともまた事実である。ことコレクション類の目録作業については、すでに一介の図書館員の問題ではなく、図書館行政の立場から考え直さなければならないのでないだろうか。たとえば予算措置の面でもこれまでは、コレクション入手のためだけの予算に終わっている。その後の整理・冊子目録化についても、十分な配慮がなされれば、過度に大きな、担当図書館員の負担も少なからず軽減されるに違いない。

講義の大半が終了した第三日目の最後の時間には情報交換・座談会が催された。ここでは各図書館における貴重図書の扱いが中心話題になったが、その際に配布された「貴重図書に関するアンケート」のまとめは、現在、法学部図書委員会で協議されている法学部所蔵貴重図書の取り扱いをめぐる論議に早速役立っている。

ところで、学術情報センターが総合目録データベースシステムを完成し、全国の図書館の多くがそのネットワークのもとで作業を開始しているが、いわばノーレフリーのシステムで有ることから、書誌データの品質は個々の目録業者の資質にかかっているとさえいえる。その意味で、この時期に図書館員のもっとも基本的な姿勢を教示してくれたこの講習会は有益であり、学ぶところ大であった。また最後に、一橋大学古典資料センターが中心となってこれを支えていることに、敬意を表したい。(法学部図書掛)

九州地区国立大学図書館協議会実務者連絡会議（昭和63年度）

（とき：昭和63年10月28日（金）　ところ：琉球大学附属図書館）

15大学から26名の参加のほか文部省から船戸係長の臨席を得て標記会議が開催された。主な討議題は次のとおりである。

1. 学術情報センター目録システムの運用について
2. 留学生増加に伴う資料整備等図書館の対応について
3. 外国資料の契約方法について
4. 相互貸借方式の新しい展開について
5. 利用教育・利用指導のあり方について

各議題について活発な討議が行われたが、特に議題1,4については各図書館室担当者の理解を得る必要からその要旨を記しておきたい。

議題1では、現在の学術情報センター目録データベースでは、データの重複や記述の不備なデータが多く、このため登録や検索において誤った判断を引き起し悪循環を繰返す結果となっている。これらの要因として、各種ファイル類へのアクセス技術が未熟なこととNCRに準拠すべき入力基準の不徹底さ等が指摘された。

議題4では、相互貸借を進めるに当り、これまでは国立大学図書館間における制度的な合意が十分になされてなくサービスのあり方について種々指摘されてきたところであるが、この度相互貸借推進方策調査研究班における2ヶ年に及ぶ調査の後、最終報告として取りまとめられ国立大学図書館協議会総会等で承認された経緯がある。現時点では、何時から実行に移すのが1つの問題であるが、各図書館室は運用開始に当り貸し出す場合及び借り受ける場合の基本方針を決定し公表することが急がれている。

なおこの会議には二宮第一目録情報掛長が出席した。

NACSIS-IR及びNACSIS-MAILに関する懇談会について

学術情報センター主催の標記の懇談会が、去る昭和63年12月15日、九州地区の主な大学の直接利用者及び業務担当者を対象に、中央図書館で開催され、センターの担当者による各サービスの現状紹介と端末を使用した実演が行われたあと、センターの関係者4人と参加者30人との間で活発な意見の交換がかわされました。

(((学 内 マ イ ク)))

図 書 館 利 用 案 内 を ビ デ オ で

中央図書館では、去る11月25日、28日と30日の3回にわたって教養部から箱崎キャンパスの各学部への進学生を対象に、ビデオによる図書館利用のオリエンテーションを新しい視聴覚ホールで開催した。

利用案内のビデオを見た学生の感想は“画面が明るくて見やすい”とか“図書館の利用方法の概略がよくわかった”等、概ね好評であった。

その後、引継ぎ、小グループで何時でも見られるように、3階ホールに利用案内のビデオコーナを設けておりますので、「図書館利用のしおり」と併せて自由にご覧下さい。

このビデオは中央図書館を上手に利用するために、主に九大の学生諸君を対象に、オリエンテーション用として製作したもので、中央図書館を初めて利用する学生諸君が一番知りたい事柄、即ち図書を探し、読み、借り出すといった手順、手続き等、利用方法を中心に併せて利用施設全般を案内しております。上映時間は20分間、全体の構成も上々で画面も明るく、一貫性とストーリー性をもたせていますので見やすくでき上っています。

今後、学部のアリエンテーション等で本ビデオの利用ご希望があれば何時でもお貸し致しますのでお申し出下さい。
(情報サービス課)

閲覧室の環境整備について

よりよい学習環境作りをめざして、このたび3階開架・指定書閲覧室の床張替工事を完了しました。

足音等の騒音を減少するため、床材を今までのソフトビニールシートから閲覧座席部分はタイルカーペットに、書架部分はビニールシートに変更しました。

工事期間中はご迷惑をおかけしましたが、今回の工事により2階及び3階の閲覧室とも張替が完了しました。このことにより、今後はより静かな環境での学習や研究活動の場を提供できるようになりました。

(((お知らせ)))

視聴覚ホールの使用料金等について

九州大学附属図書館視聴覚ホール（以下「視聴覚ホール」という。）の使用内規については、図書館情報（Vol. 24, No. 3）でお知らせしましたが、今回は、同ホールの使用料金と利用上の留意点について、報告と若干の説明を加えさせていただきます、教職員の円滑な利用に供したいと思っております。

使用料金は別表1のとおりとなっております。

本料金算定については学内者向け料金といたしており、おおむね実費弁償程度の額となっております。また、納付方法については、校費移算で行うことになっておりますので、申込みに当たっては各部局事務部と連絡の上、手続きされるようお願いいたします。

使用時間については、いわゆる平常の勤務時間の範囲内ということになっておりますが、やむを得ず当該時間を超えて利用される場合におきましても、安全管理に十分配慮して同ホールが使用されると館長が判断した場合には弾力的に運用したいと考えておりますので、勤務時間を超えての御利用を希望されるときは、各部局事務部を通じて図書館あて御照会願います。

視聴覚ホールは定員250名で、別表第2に掲げる設備を備えておりますので、次に掲げる行事等の御利用に最適ではないかと考えております。

1. 授業
2. 公開講座
3. 記念講演
4. 入試説明会
5. 新任研修会等事務研修会

以上、視聴覚ホール等の使用料金等について説明いたしました。国の施設は有効かつ効率的に利用されることが望ましいことでもあり、できるだけ多くの教職員に利用されることを望んでおります。

別表第1

視 聴 覚 ホ ー ル 使 用 料 金

使用区分	使用料金	内 訳					備 考
		電気料	上水道料	下水道料	エレベーター 使用料	冷暖房料	
9時から13時まで 又は 13時から17時まで	円 2,020	円 480	円 570	円 930	円 40	円 ———	4時間使用(半日)
冷房使用の場合	4,950	480	570	930	40	2,930	
暖房使用の場合	5,850	480	570	930	40	3,830	
9時から17時まで	3,980	950	1,130	1,860	40	———	8時間使用(1日)
冷房使用の場合	9,830	950	1,130	1,860	40	5,850	
暖房使用の場合	11,630	950	1,130	1,860	40	7,650	

別表第2

1. ビデオテープ投影(再生装置)
2. カラー教材提示(データビューアー)装置
3. 映写装置
4. スライドフィルム映写装置 35mmスライドフィルムプロジェクター
(350Wクセノンランプ使用大公開写用)
5. オーバヘッドプロジェクター(OHP)

(((図 書 館 統 計)))

昭和62年度 文献複写受付統計・相互利用統計

中央図書館

種 別 区 分	電子複写		引 伸		マイクロフィルム		合 計	
	件数	枚数	件数	枚数	件数	コマ数	件数	枚数
国立大学	3,753	41,352	1	36	2	539	3,756	41,927
公私立大学	1,490	16,534	3	354			1,493	16,888
上記以外	2,449	9,920					2,449	9,920
合 計	7,692	67,806	4	390	2	539	7,698	68,735

文献複写	受付(学外から受付した件数)	7,698
	依頼(学外へ依頼した件数)	2,890
	計	10,588
相互貸借 (冊数)	受付(貸 出)	286
	依頼(借 用)	106
	計	392
他機関利用 (件数)	国立大学図書館間共通閲覧証	41
	学外図書館利用依頼状	123
	計	164

昭和62年度 文献複写依頼統計・学内複写等統計・全学共同利用複写機統計

中央図書館

部 局	学外へ文献複写依頼件数			学内文献複写等受付件数				合 計	会学共同利用複写機 枚 数
	校 費	私 費	計	複写	引伸	マイクロフィルム	計		
文 学 部	170	638	808	7	1	2	10	818	8,573
教 育 学 部	4	131	135	1	1	1	3	138	
法 学 部	43	109	152					152	277
経 済 学 部	39	70	109		5		5	114	238
理 学 部	103	63	166	3	11		14	180	256,921
医 学 部				23			23	23	
歯 学 部				33			33	33	725
薬 学 部									2,491
工 学 部	546	95	641	83	2		85	726	53,424
農 学 部	306	305	611	11	1		12	623	212,714
農学部附属農場	7		7					7	5,521
農学部附属演習林									226
教 養 部				249	1		250	250	6,958
生体防御医学研究所	2		2	13			13	15	
大学院総合理工学研究所	97	5	102	23	1		24	126	9,323
応用力学研究所	59		59	51			51	110	817
生産科学研究所				5			5	5	749
健康科学センター	28	33	61	45			45	106	
医療技術短期大学部									5
機能物質科学研究所	23		23	35	2		37	60	3,756
情報処理教育センター	3		3					3	
留学生教育センター		11	11					11	
事 務 局									2,070
図 書 館									1,208
合 計	1,430	1,460	2,890	582	25	3	610	3,500	565,996

◆ 日 録 (昭和63年10月1日～12月31日)

- | | |
|---|--|
| <p>10. 20 第62次国立七大学附属図書館協議会並びに第
～21 21回国立七大学附属図書館部課長会議(仙台
市長陵会館於)</p> <p>10. 28 昭和63年度九州地区国立大学図書館協議会実
務者連絡会議(琉球大学於)</p> | <p>11. 16 理事会(昭和63年度第2回)及び昭和64年度国
立大学図書館協議会賞受賞者選考委員会(第
1回)(京都大学於)</p> <p>11. 17 第2回国立大学図書館協議会シンポジウム
(大阪大学於)</p> <p>12. 15 学術情報センターとの懇談会(九州大学於)</p> |
|---|--|

編集委員 主査・辻本 和央 委員・天野 二郎, 大神 義生, 福永 寿夫(中央図書館), 緒方 義信(医学分館), 大賀 利彦(教養部分館), 三島 博義(理), 山田 玄連(法)

九州大学図書館報「図書館情報」 Vol. 24, No. 4 (通巻152)

1989年1月31日発行・発行人 吉岡 千里

発行所 九州大学附属図書館・〒810福岡市東区箱崎6丁目10番1号 電話 641-1101 内線 2454